

1996年9月、早朝。私は男の子を出産しました。ビックリするほどの安産で、出産後の最初の一言は「朝ご飯、食べられますか？」(笑) それほどまでに、余裕の出産。

妊娠中は、最後までつわりがひどかったけれど、産んだあとは、ごはんがおいしい。仰向けで眠れるようになって、ほくほく。それが、出産直後のわたしの姿でした。産んだ病院は母乳重視。それも、ねがったりできなかったり。母乳指導も、いたれりつくせりで・・・私は幸せの絶頂でした。

ところが、産後5日目に、息子はおしりに血腫が発見され、手術をすることに。その後、退院してからも、毎日の様に消毒と切開した傷の具合をみるため、通院することになったのです。傷の化膿を止めるため抗生物質を飲ませました。そのため、ひどい下痢がつづいたのです。その上、傷の痛みからか、息子は全然眠りませんでした。寝かせると泣くため、ずっと抱っこして寝かしつけました。わたしは、昼も夜も横になることは出来ませんでした。ずっと座った格好のまま、一日を過ごしました。寝る時も息子を抱いたまま、座った状態で、クッションを背中と左右に配置して眠りました。

こうして日々が過ぎていき、わたしは慢性の寝不足と、腰の痛みと疲れのピークに達してしまいました。

夫も私も土地の人間ではなかったもので、知り合いもなく、誰にも相談できず、実家も遠いため手助けを呼ぶことも出来ませんでした。

そして、息子が3ヶ月になったときのこと。

身体の湿疹がひどかったので、わたしは息子を病院に連れていきました。

そこでうけた診断は・・・

「アトピー性皮膚炎」

アレルギーを特定できない、とのことでした。

湿疹のジクジクはひどくなり、身体中が血と浸潤液にまみれ、痒がって昼も夜も泣き喚く我が子。どうしたらよいかかわからず、私は片っ端からアトピーの本を読み漁りました。

夫に相談しても、夫は

「大きくなれば治るさ」

と、無関心。

そして、病院では行く病院ごとに違う診断と違う指示。

それが、わたしをさらに追い詰めていきました。

息子はその後、1歳で喘息と診断されました。

気候が崩れると、とたんに体調を崩し、入退院を繰り返す。そんな日々が続きました。

・・・実を言うと、この頃の記憶があまり鮮明ではありません。

ただ、すごく疲れていました。

毎日毎日「一日も早く楽になりたい」と考えていました。

そしてある日とうとう、ストレスの余り、過呼吸の発作をおこして、救急車で運ばれたのです。

過呼吸は、心の病です。でも、まるで今にも息が詰まって「死んでしまいそう」になるのです。

そういうことが続くうち、だんだん私は眠れなくなりました。

そして、神経が過度なくらいに過敏になり・・・

ついには、「子どもと一緒に、死んでしまおう」と毎日思うようになりました。

ある日、私はフッと我に帰りました。

その手には、一本の包丁が握られていました。

でも、なぜ私は自分が包丁を握っているのかがわからなかったのです。

記憶がまったくくないのです。

「これは、おかしい」

私は思いました。

「あたしは、今、おかしい」

そう。

私は確かに、変でした。

地に足がついていない、フワフワした感じ。

訳もなく泣きたくなくて、死にたくなくて・・・

この状態をわたしはかつて、学校で学んで知っていました。

“心身の喪失” “うつ状態”

わたしはすぐさま、子どもを抱いて、本屋に走りました。

”産後のうつ状態”について書いてある本を求めて。

私は、文字通り、走ったのでした。

それは、息子が3歳になった頃のこと。そして、息子が、6度目の入院をしたすぐ後のことでした。

<続く>